

晶子さんのこと

西川文子

明治三十一年の春、私の学んでいた京都府立第一高女の本科五年に、鳳里子という人が編入試験にパスして入学された。五年に入学するくらいだからとても学課のよく出来る人であった。

私は、どういふものかぢきにこの人と大変仲よくなり、寄宿舎におりながらも始終往来して、殊に夜分など、七時から九時までの勉強時間が終つてもう寝る時刻が来ても、こっそり里子さんの部屋に行き、草履を障子の陰へかくして一緒にやすみ、舎監の巡廻が終つて皆が寝静まつてから自分の部屋へ戻るのが常であった。

或る日、昼休みに校庭を散歩していた時、里子さんは、姉はとても偉らい人だ、蔵にある蔵書を源氏でも古事記でも増鏡でも何でも皆な読破している、と話すので私が、でも平野先生には及ばないでしやうと云うと、「ソナナの問題ぢやないわ、」とブンブンにおこられた。

里子さんの姉は当時は未だ鳳晶子しょうじといつて、(名前は親のつけてくれたものだが文字の読み方は何とよんでも差支えないと後年自ら晶子と呼び改められた)——とても分らない字で、家の事でも何でも面白おかしく書いた手紙が毎日のように来た。壽三郎(注1)という兄さんの事を中将の君とか何とか書いたりして、その人の事を晶子さんと里子さんとの間の小兄さんと云っていた。

三十二年に私達は本科を卒業して補習科に入り、そして三十三年に始めて出来た国漢専攻科に入って、二年の後に卒業した。

里子さんと私はそのとき開校される筈の東京の日本女子大学の英文科に入学するつもりで、先ず英語を習う目的で京都府庁の通訳官の稲垣いねがきという人の家に下宿していた。

丁度そのころ、晶子さんが始めて東京に上られるといふのでその途中を立寄られ、私は初めて晶子さんに逢った。かねて噂にきいていたので、どんなにハイカラな人かと思つていたら、実に相違して、腰の低い、姿勢の良い、商人のような人だったので一寸意外に思つた。晶子さんも亦、そのような自分の容姿を知っていたと見え、いつも里子さんに、「あんたほど色が白くて綺麗だったらいゝと思ふが……。」と云つておられたとか。それくらいだった晶子さんが後年はあべこべに、その魅力ある大ぶりの顔の上に艶やかな黒髪を豊かに置いた迎も見栄えのする面持ちに変わったので、私はつくづく才智のかがやきといふものゝ不可思議さに驚いたものだった。

晶子さんは最初、工博で帝大教授だった長兄の秀太郎氏を頼つて

上京されたのだったが、嫂の玉枝さんから、晶子さんのこわい顔を見て長女の赤ん坊が泣いて困るといわれたのが因で長兄方を出て、それ以後は与謝野寛氏を頼ってゆかれるようになった。丁度そのころ文壇の一隅から「文壇照魔鏡」という与謝野氏攻撃の怪著が出た折柄でもあったので、単純で「徹な学者肌の秀太郎氏は大へん驚き、晶子さんを連れ戻そうとして、わざわざ威嚇用のピストルまで懐中して与謝野氏方へ行かれたが、それも遂に効を奏すことが出来なかった。しかし同氏はそのまま永く晶子さんとの交際を断られた。

秀太郎氏は性来の美人好みで、京都で母と娘の二人暮して絵を習っておられた玉枝さんを娶られたのだが、玉枝さんは、流石に秀太郎氏が目星をつけられた女性だけあって非常な美人であった。

一方、里子さんは最早そのズット以前から私の兄の妻になっていたという関係から、私はこの嫂を通してすでに玉枝さんや晶子さんとも親しく交際していた。玉枝さんが私達の家に来られた時、夫君が欧州留学土産に独逸から買ってきてくれたという金時計を、「見せまほか」と云って其の透きとおるような襟頸から大事そうにはずして私達に見せてくれたこともあった。この人が、春秋のお彼岸には必ずと云ってもいゝほど里子さんの処へ牡丹餅を拵らえて持ってきてくれたが、どういふものかいつも形の大きいのと小さいのとあるので、これは屹度、おなかの空いている時に大きいのを喰べ、そうでない時には小さいのを喰べるように交ぜてあるのかしらん、などとツミのない冗談口を利き合って笑った。

玉枝さんは綺麗な人だったから、自分では交際場裡にも出たかったらしいが、秀太郎氏は決してそれを許されなかった。

その後、晶子さんの所にも子供さんが次ぎ次ぎと生れ、また私達の所にも生れたので、お互にお祝の布地を贈ったり貰ったりした。私の家で長男の生れた時は、どうにも手不足だった為め晶子さんの家の女中さんを貸して貰ったことなどもあった。

白きものは画に見し耶蘇の童形をたわやがいなに抱き玉ふやという祝歌はそのとき晶子さんから貰ったもので、他にも山川登美子、増田雅子の両氏から連名で祝詞ハガキを頂いたことなども思い出される。

当時はお互になかなかの貧乏で、晶子さんが自家の女中さんを浅草見物に連れていった帰り、財布の中にはタツタ二銭しか残らなくて実に心細かったと言われたが、私達も、それからずっと後年、子供を連れて浅草に往き、囊中をたしかめずに蕎麦屋へ上り、勘定の際になって持金の不足に気付き、よんどころなく持合せの電車券まで差出したら、その女主人が、お子さんを連れて帰られるのにまきり徒歩ではお困りでしょうからこれは頂かなくても結構だとい

って電車券を返して呉れたことがあったが、そのときの蕎麦屋の女主人の親切な気持は、とても忘れ得ない嬉しかった思い出として、まだに私の心の隅を温めていく。

晶子さんは“千駄ヶ谷の極貧時代”とよく口にされたが、私がお訪ねした或る時など——タシカ明治三十七八年頃のことだったかと思うが——「応おもてから声をかけても誰れの返事もなかったので、念のため裏口へ廻ってみたら、勝手口のゴミ溜には大量の蜜柑の皮が文字通りに山積していて、私はその余りにも無茶な贅沢にすっかり驚いて帰って来たこともあった。

明治四十一年頃は、私は夫が留守だったため二年ほど田舎の兄の家で暮らした。嫂の里子さんが、「姉は二階でどんな仕事をしていても、子供が戸外から戻った気配さえ知れば直ぐ階下へ降りて来て急いで子供の服を着替えさせる、何しろ十九円も出して造った洋服なのだね。」などという話をしたり、また、晶子さん一家が神田のニコライ堂近くに居って長男次男を暁星学校に入れているため、月額二百五十円の巨費が要るそうなどという話を聞かされ、私は“まさか”とは思ったけれども、晶子さん（注）のあの経済ぶりではそれもまた満更ウソでもなさそうに思われた。（当時の普通給料は凡そ三十円前後というところだった）

そのころ伊藤証信、朝子の両氏が結婚され、二人の結婚写真の送られて来たのを見た晶子さんが、赤松さん（徳山高女校長）もひどい人だ、こんな尼さんをととう結婚させてしまつて……と憤慨気味に云われたこともあったが、この伊藤朝子さんは、私が大正の初期「新真婦人」を出して婦人運動をしていた頃やはり同人として私共の仕事をよく手伝ってくれた人で、私達の間では恋愛哲学随一の研究家として知られ、とても尼さんどころの比ではなかった。あまり甘さが強いので、同人間では窃かに彼女をサッカリンなどと呼んでいたこともあったほどだった。

明治三十八年頃に伊藤証信氏の無我愛の宣言発表などと前後して綱島梁川氏が見神され、また私の兄も頻りに見仏を唱え出したのを与謝野寛さんが大変に共鳴され、志知善友仏こそ尊とけれ、善友仏こそ尊とけれ、などと自宰の「明星」誌上で讃称して、自分も一緒に全国を説教して歩くと言い出された。寛氏はお寺の出で幼少時から説教には馴れており、仲々上手であった。晶子さんとしてみればまさしく一大恐慌で、これは是非西川の口から与謝野の説教行脚を止めさせるように諫言して貰わねばならぬと、わざわざ私達の家へ頼みに来られたこともあった。

明治四十四年の晩秋、寛氏はフランスに行くとして、青森林檎と幼児用（私方の次女の為め）の布地を持ってお別れの挨拶に来た。そしてその翌年、夫君をパリに追いかけられた晶子さんが寛氏よりも一足先きに帰られた時、私は晶子さんを靖国神社裏の住居に訪ねてパリ婦人の化粧法などを聞き取って、当時主人の出していた「人物」という月刊誌に載せたようなこともあった。

寛氏の帰朝されたとき、出迎えに行った晶子さんが紫のヴェールを被っていたので、二十三四歳にしか見えなかったと新聞が書いたのを寛氏は、女は綺麗だといわれるよりも若く見られるのがとても嬉しいようです、と言って笑われた。事実晶子さんは若々しくて、派手な浴衣などのよく似合う人だった。そんな人だったからいつも私に、「お文さん、もっともっと派手なお召もの、めしませ」などとよく言われたが、私にはとてもその提言は実行出来なかった。

晶子さんはなかなか思いきった人で、洋行土産に生れた子供さん、オーギスト・ロダンを記念してオーギストと命名された。尤も当時は片仮名の名前の流行した頃でもあったが——。間もなく引き移られた中六番所のお宅や富士見町のお宅へも私は度々お訪ねしたが、晶子さんはいつも殆ど例外なしに大きなおなかをしておられた。「女は産屋にいるうちだけが女王のようです。」とほほ多みながらよく晶子さんは言われた。忙しい中でも育児には一生懸命で、着物などもとても早く縫われ、「こんな事だけしているのならまったく気楽ですがね、」とも言われた。十二人もの子供を産んだ晶子さんに対し、貴女など実際国宝なのだから精々御身を大切にして下さい、と私が云うと彼女は、国宝なら国家で相応な補助をしてくれても宜い筈だけれど、それが来る月も来る月も金尾文淵堂参りをしなければならぬとわね、と微笑しながら言われた。金尾文淵堂の主人の種次郎氏は大阪出版書店主で、特に晶子さんの著書には十露盤又キで立派なものを何度か作られた。種次郎氏は、どちらかといえばはにかみやの無口な人で、その人の前に「新真婦人」のための新刊広告を出して貰いに行くのが何だかテレ臭くて恥かしかったが、それでも仕方なく幾度か行っては貰って来たことを覚えてる。

晶子さんは昔から綺麗な上品なものが好きで、汚いもの、下等なものが大嫌いだった。里子に出しておいた双生児の一人を手許に引取った当時のこと、或る日酒屋の配達して行った勝手元の味噌をその双生児がこっそり少々嘗めたと云って、ほんとに下品ですよ、と本気になって私にコボされたことがある。それくらいのは幼児とすればしがちのことで、何も咎め立てするほどのことでもないのに、晶子さんの瞳には矢張りそうは映らなかったものらしい。

私達が正大震災後は阿佐ヶ谷に住み、与謝野さん一家は荻窪に住まれたので、省線電車^{注3}の中でも時どき寛氏とはよく顔を合
わせた。

ある日荻窪のお宅に上ると、今朝はやく新聞記者が来てお目出と
うというから、何かと訊き返したら長男が医博の学位をとったとの
ことだったと嬉しそうに語られた。また新宿辺の電車の中で一緒に
なった時、次男が外交官試験に二千人中の合格者二十人の中から更
に選抜した三人中の一人に加えられたということの嬉しさを、どう
にも包みきれぬという面持ちで朗らかに私の前に語った。

その晩年、私と娘と近所の田園畝道を散歩していた折り、丁度寛
氏夫妻もその辺を散歩しておられ、誘って下さるまゝに帰路お寄り
すると短冊二枚を贈られたが、この時がついに此世で寛氏と面語し
た最後の機会となった。^{注4}

晶子さんは昔から、「われむかし長者の子をば羨みぬ、いま愁う
るもこの病のみ」などと歌っているように、長者、物持ちの生活に
は強い憧れをもっていた人だったが、人生ねがうことはいずれ何等
かのカタチで必ず与えられるものとみえ、晶子さんの生涯は、そ
の或る二時代ひどく貧乏にさいなまれはしたものの、矢張り結局的
には実に幸福此の上ない人であった。

そうした晶子さんも、昭和十七年五月の末ついにあの世の人とな
って、すでにそれより七年前に逝かれた寛氏とともに、今は安らかに
多磨墓地の一角に眠られているが

なには津に咲くこの花の道なれどむぐら茂りき君が行くまで
—— 寛氏墓前歌

今日もまたすぎし昔となりたれば並びて寝ねむ西のむさし野
—— 晶子氏墓前歌

という彼女の詠の刻牌に護られた両基の墓碑は、比翼塚の名実を惜
しみなく後世に留めるしと見て真に遺憾のないものである。

「武蔵野ペン」第三号 (昭和三十四年、武蔵野文学会)

注1 原文は「寿三郎」

注2 原文は「晶さん」

注3 原文は「省練電車」

注4 原文は「機会とななった」

武蔵野ペン

第三号

定本「歌かざるの記」句……………	編 集 部 (1)
松岡荒村の文学……………	天 野 茂 (8)
徳富芦花に寄せた前田河広一郎の在米通信句……………	編 集 部 (28)
半山・秋水・枯川・九阜……………	滑 水 三 郎 (36)
「田中正造翁」に関する島田三郎氏の手紙 ……	島 田 宗 三 (44)
火……………	徳 富 芦 花 (55)
新篇武蔵風土記稿執筆の人々とその碑談……………	本 山 桂 川 (56)
晶子さんのこと……………	西 川 文 子 (58)
上 野 界 隈……………	野 田 守 太 郎 (63)
報……………(62)	編 集 後 記……………(88)

武 蔵 野 文 学 会

武蔵野ペン 第三号
昭和三十四年五月二十日 印刷
昭和三十四年六月十日 発行
編 集 兼 発 行 者 後 閑 林 平
印 刷 局 朝 陽 会
発 行 所 東京都豊島区人面町六一五
武蔵野文学会
振替東京八三四〇三